

街を行く

第90回 西川口 *Nishikawaguchi*

しぶとさと我慢の共存

西川口は、高度成長期には鋳物の街として知られていました。吉永小百合と浜田光夫の日活純情コンビが主演した映画「キューポラのある街」では、この街を舞台に鋳物工場で働く職人家族の暮らしが描かれています。小生はリバイバルで観ましたが、当時はまだ子供でキューポラという言葉がわからず、それが鉄の溶解炉のことと理解するまで長いこと疑問だったことを思い出します。スクリーンでは貧困や親子間問題に始まり、民族や友情、性の問題まで取り上げています。名作なので、まだの方は是非ご覧ください。映画にも出てきますが、荒川の堤防沿いには沢山の鋳物工場があって、そこにそびえ立つ煙突はさながら街の象徴のようでした。今の様相はすっかり変わり、あの煙突は高層マンションに入れ替わりました。都心アクセスの便利さを考えれば、住宅街へ変貌するのは自然の流れですよ。

鋳物のビジネスは、時の流れから受注が減少、殆どの工場は廃業したわけですが、皮肉なことに仕事量が減る勢いよりも閉鎖した工場の数が多かったため、残った工場は忙しく稼働しています。街は変われども職人の技術水準は昔と同様に高く、AIをも凌ぐほどの精密さを保ち続けているそうです。これは西川口だけの話ではなく、日本全国の町工場で起きている現象なのだと思います。

さて、キューポラの街はその後、「風俗の街」として有名になりました。駅の西側には「風俗銀座」と呼ばれるほど多くの店が立ち並び、その善し悪



衰退する風俗街と新たに現れたチャイナタウン、西川口は「しぶとい」街だ

しは別として歓楽街として栄えました。やがて、行政などの指導が入り、風俗店がほぼ一掃されると再び灯が消えたかのように寂しくなりましたが、そこに目を付けたのが「中国ビジネス」です。風俗店が抜けた空き店舗の安い賃料を目当てに、多くの料理店や生活雑貨店が開業。多くの中国人も移り住んできて、今では「チャイナタウン」の様相を呈しています。鋳物の街から風俗街に転じ、さらに今の姿へ変貌を遂げた西川口は、ある意味で何とも「しぶとい」街と言えるのではないのでしょうか。実は、このしぶとさこそ、これからの街に必要なポイントと言えます。経済基盤は変われども、そこに人が暮らす限り街は生き続け、その時々状況に合った“顔”を持ちます。本連載「街を行く」

の根底に流れるテーマを象徴するような、しなやかで柔軟性ある街と言えそうですね。お上から計画を押し付けられ、既存産業が衰える局面となっても、街は自分の力で変わることができるのです。ある程度、街に自由を与えましょう！

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。